Osaka University Knowledge Archive

Title	特殊モーラ習得過程の研究
Author(s)	嵐, 洋子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46563
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【25】

氏　　名	嵐（あらし）　洋子（ようこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　１９９５１　号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	**特殊モーラ習得過程の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　土岐　　哲 （副査） 教　授　真田　信治　　助教授　石井　正彦

論文内容の要旨

本論文は、特殊モーラの認識や表記等に必要とされる「拍感覚」とは、具体的にどのような能力であるのか、また、それはどのように習得されるのかについて明確にすることを目的としたものである。第二言語としての日本語教育に寄与することが究極の目的ではあるが、まずは、日本語母語話者の子供に焦点を当てて進めた。全体は４章からなり、400 字詰め原稿用紙に換算すると約 460 枚に及ぶ。

第１章「研究の対象と目的」では、本研究のアプローチ、対象の設定、研究の全体構成について述べている。第２章「先行研究」では、従来の研究の問題点について触れ、本研究の特色として加えた新たな観点について述べている。子供が特殊モーラ意識を習得し、特殊モーラが表記できるようになるまでの過程とその要因を、より詳細に明らかにするために、以下の諸点に注目する。⑴モーラを数える方言地域と数えない方言地域の子供から得られたデータの比較、⑵これまでの研究では見られなかった「幼児から児童に成長する過程」での縦断的調査による手法の採用、⑶特殊モーラ意識習得の具体的な要因を探るための種々の実験的試みの継続等。第３章は、本論文の中心である。調査と考察の結果として、次のような新しい知見を提示している。⑴特殊モーラ意識は、かな文字習得の結果として習得されるのではなく、個々が持つ音韻体系と深く関わっていること。⑵全体的に青森県深浦町の幼児の方が横浜市の幼児よりもモーラの単位で分節する傾向が低く、このことは地域の方言が関わっていることを窺わせる。幼児期の調査結果では、横浜市では撥音と長音の差は見られず、これら二つと比べて促音をモーラの単位で分節する傾向が低い一方、深浦では、撥音＞長音＞促音の順にモーラの単位で分節する傾向が低くなる。深浦では、小学校１年生の終わりになっても長音の識別等に関しては依然個人差が見られ、特殊モーラのうちとくに長音が横浜市と深浦町の結果で最も異なる。⑶長音の意識を習得していないと思われる子供は、持続時間だけでは長音があるかどうかの判定が不安定で、ピッチ変動の有無にも頼っている。子供は長音の意識を習得する過程において、ピッチの上がり下がりを一つの手がかりとしている可能性が高い。⑷特殊モーラ意識の習得に至るまでに、①韻律単位としての特殊モーラを知覚する段階、②音韻単位としての音節・モーラを習得する段階、③特殊モーラ意識の習得（特殊モーラを含む語を分節する時に、モーラの音韻単位を選択できる）という３段階があるなど、独自の議論を展開し結論付けている。第４章では、今後の主な課題について述べ、①⑷に挙げた習得過程の段階の実証、②特殊モーラ意識習得の要因の追求、③様々な方言地域での特殊モーラ意識の比較、④これらの知見を日本語教育に応用する可能性などについて触れ、締めくくっているが、本研究で明らかにされたことは、心理言語学、音声学、社会言語学等に通じる諸点を窺わせるものとなっ

ている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、長期にわたる根気強いフィールドワークによって得られた貴重なデータを基に、従来の「特殊モーラ」習得に関する研究では及ばなかった領域にもある程度踏み込んだ研究となっている。また、従来、日本語教育に関わる研究と言えば、日本語を母語としない学習者を対象にするものと相場が決まっていたが、こと音声・音韻に関わる研究については、日本語方言話者の場合であっても相通じる側面を有するものであるという独自の切り口に挑み、新たな見方を提示した。シラブル言語を話す地域に、約３年の長きに亘って通い続け、幼児から児童に成長してゆく子供に定期的に接触し、実験を繰り返してきた。子供が、当該のパラメータである特殊モーラを習得してゆく状況をつぶさに調べるという縦断的調査を敢行し、特殊モーラ習得の動態を追究するという、他には類を見ない研究を実現させ、新たな知見を導き出したことは、今後のこの種の研究に対する、一つの道標となることが期待される。ただし、そうした中にも、更に検討すべき問題が散見される。データの検証に用いられた「モーラを数える方言地域か数えない方言地域か」という見方以外に「都市都の場合かまったくそうではない場合かによる学習環境の違い」「家族環境による学習条件の違い」などの要因は考えられないであろうか。これらは、なお検討の余地があろう。また、「習得の段階」について述べたことが日本語学習者の習得に対してどのような示唆を与えるものなのか。「統計処理」によって全体的傾向を示すだけではなく、個々の習得過程からも新たな知見が得られるのではないかなどといった問題もあるが、これらの点は、今後ひとつひとつ発展させてゆけばよいことであって、そのこと自体は本論文の優れた価値を損なうものではけっしてない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。